

山路愛山「懐旧録」

解題

山路平四郎

以下掲載する愛山の「懐旧録」は、文中で「かかるを書き置くは我が歴史なればなり、人に見せんとにはあらじ」といつているように、愛山がその少年時代の思い出を、恰も手控え式に順序も樹てず八修史材料乙Ⅴと題した手帖の一部に書き記したものである。きわめて短いもので、手跡の具合から推して、おそらく調べものの余暇、二、三日で書きさし、

その儘に放置したものであろう。この手帖の他の部分に、明治二十七年七月下旬の日附がみられるから、これが書かれたのはそのやや以前の時らしく、その内容が愛山の人生体験であるという点からすると、最近平岡敏夫氏が「山路愛山の文学」（国語と国文学・昭和三十八年十二月）の中でとりあげた「人生」と「命耶罪耶」（いずれも国民新聞所載）との間の橋がかりとして位置すべきものと思われる。当時史家としての愛山は民友社の十二文豪「新井白石」を脱稿済みと察しられるが、この前年、同じく十二文豪のうちの「荻生徂徠」を世におくっている。これは愛山の処女出版とも称すべき記

念すべきものだったが、徂徠が然るべき官医の家に生れながら、逆悪な運命の下で少年時代を刻苦勉勵したことを思えばこの「懐旧録」を読む人、その著作の偶然ならざることを感じるであろう。

懐旧録

我が祖父は極めて儉素にてましませしかばはな紙なども幾度か干かへして用ひ玉ひき。

「ランプ」をも祖父君在世中の時まで（明治十四年歿、我が年十八の時なり）用ふることなく、在来の行燈を用ひしが、常に燈心一本より外は用ひ玉はざりき。

一が番に住みし時、久しく疊がへせざりしかば、疊は垢と塵とにて黒く光りしを、吉田氏衛生に害ありとて屢々忠告し玉ひしかば、漸くにしてかへられたり。其時庭前に風の矢たまりていと臭

かりしなり。

小児の時吾れは虚弱なりしかども、軍ごとといふを好みき。小児の中、謀にたけたりと云はれき。

米山貞昌氏曰ふ、吾れは近隣に神童の名ありきと、自ら知らざれども人の吾れを見る厚かりしは知るべきなり。

石黒誠次郎（年吾れより三ばかり弟なり）は同じ嫌頭学校の生徒なりしが、時の静岡県書記官石黒務の次男なり。此人より吾れは近時評論、名譽新誌などいふ書籍を借りて読みしことありき。

吾れは彼と甚だ莫逆にて、学校の帰るさ共に議論を上下せしことありき。其頃の議論は勿論小児のことなればただ幼びたれど、我国は海軍を盛にせざるべからず、封建の政治こそよけれ、四境は皆兵国なれば海外の攻撃に対ふに便あればなど語らひしこと今も猶心に在り。

我れ小学校に在り時、読書と算術は人に劣ることなく善く出来たりしかども、記憶は悪しかりしかば博物図などの暗記は極めて拙なりき。

石黒と共に学校の還るさ城中にて一はつの花取りて遊びしことも度々ありき。

吾れは極めて貧しくそだちたれば衣物なども見ぐるしかりつるなり。されどそを苦しとは思はざりき。大抵幼き時は筒袖のみ

着せられて、袖ある衣服をきざりしかば、そを着たるものを羨ましく思ひぬ。身に虱出来て友に見とがめられ恥かし思ひしことありぬ。

祖父君儉約なりしかば、五六年の間麦飯たふべて過しける。吾れは米の飯くらふことをこよなき幸とし、入江氏など云へる旧知の家に行きて飯振舞をこよなき幸としたりき。

入江氏といへるは其頃鷹匠町に住みたり。奥留氏と我家との通家なり。思ふに天文の事にて我家の関はりあるなるべし。入江進八郎といへるは其頃老人なり。始め官吏たりしか今は覚えず。此人清業をよくし、蔵書にも富みたり。余が其家に往来せしは進八郎の死後なり。進八郎の妹ありて老いて嫁せず、人愛よくして祖母の仲善き友なりき。吾れは此家にて始めて古事記神武天皇東征の条を読みたりき。（二行略）

入江氏に屢々来れる中島の老刀自と云へるは腰は曲り、頭は禿なる老女なりと覚へる。孫女のおきく、孫の健ちゃんといへるが共に来る。余はよく健ちゃんを遊ばしてやりたり。

吾れ静岡の七間町といふ所より一が番に移り住みし頃、かねて通学せる麗沢舎遠くなりしかども猶行きかよひぬ。其頃祖母君と父上とは横内町勤工場といへる所に務めたまひける。吾れは祖母君を慕ひて時々彼処に行きぬ。横内町を流るる水のいと清くしてダボハゼといふものを人の捕へしをば見き。

其頃の我が朋友にて今に其名を覚え居り又は交際を続け居るは久永寿三郎（勝成）、其頃横内町に住む。田中薫丘の弟子にて我が一が番に住みし頃よりの知れる人なり。至つて親切にてよく我れを誘ひて田中氏につれ行き、且つ手を取りて手習せしめしことありき。

川村伊三太、始め横内町に住み、後に一が番に住む。横内町に住みし頃は脊のひよる長き頑童なりき。

宇佐美於菟、今にても猶有森村に住む。幼き時はいぢあしかりしなり。時々共に擲ばたを歩みながら言争ひなどしけることありき。跛なり。

宇佐美貫一、天神原に住す。至つて親切にて小兒中俠心ある者なりき。余が一が番に居りし時、嘗て一たび此人の家を訪ひしことありき。彼の父は酒飲む面白き人にて、酒はこもにて家にたくはへありき。

余が始めて手習の師とせしは田中薫丘なり。其頃余九歳（明治五年なり）なりしかども稟性虚弱なりしかば、かくは学に就くと後れしなり。父君、祖父君共に作州津山にましますしかば、祖母余を携へて田中氏に至り、其の小樓に延かれて初めて相見たりき。田中氏は人宿町に寓す。同じ町に菊地晁塘（さかひ屋とか言ひし）といへる書家ありしかども（菱湖風を書きしなり）彼は町人なればとて、祖母上は余を田中氏の弟子とせしなり。田中氏は幕府の御坊主なりきといふ。

余は田中氏に行きしより至つて腕白泣虫にて田中氏をこまらせたりき。豆筆といへるを日々幾本も費せしかば、田中氏は余に余が筆を費すを気の毒がりて、余に筆を賜りしかども、余は先生より筆をもらふをきらひていやいやといひき。されど手迹はよしとて田中氏に賞められき。

解題

愛山を理解するためには、その少年時代の環境を知る必要がある。元来、山路家は明和年間幕府の天文方に擢任された山路弥左衛門主住を中興とし、山路久次郎之徽、山路才助徳風、山路弥左衛門譜孝、山路金之丞彰常を経て、愛山の父一郎に至るまで、代々幕府の天文方を襲任した。従つて、愛山は元治元年十二月廿六日、浅草鳥越の天文台家敷に生れた。名は弥吉、幼名は左衛門。

愛山は生れながら悲劇の渦中であつた。愛山の生母けい子の母、奥留ぶき子は才助徳風の庶出の子であつて、賢夫人の誉れ高く、金之丞彰常もこの叔母には一目置かざるを得なかつた。そこでこの兩人の間で、一郎とけい子との縁組を、本人には無断で取り決めてしまつたのである。けい子も亦母に似て頭腦明晰の人であつたが、幼時痘を病んで容貌麗しからず、ために一郎の遊蕩生活が始まつた。

けい子は愛山を生むと間もなく、二度目の妊娠中に病歿し、愛山は十二月生れの数え年三才で生母に別れた。爾来、祖母ぶさ子によって愛育されたのであるが、引きつづく境遇の激変は

いよいよ愛山に対する祖母の不憫を増し、所謂お婆アさん子として育てられたのである。すなわち、愛山は五才にして維新滄桑の変に遭遇した。しかも父一郎は結婚生活の不満から、この結婚を押しつけた祖父金之丞に心よからず、ために其の反対を押し切り彰義隊に加わらんとしたが、事成らずしてからも落ちのび、一たん家に還つたものの、親子の間のうまくゆく筈はなく、再び榎木氏一行に加わって函館五稜郭に去り、しばらくは生死不明であった。

そこで一郎は家督を除かれ、愛山が家督したのであるが、明治五年、愛山九才の時に至って、一郎は作州津山に生存することとが判明し（五稜郭で津山藩兵に捕えられ、その後釈放）この度は金之丞の方から遙々と迎えに出かけ、ここに愛山は殆ど記憶のうすれた父親と再会同居することとなった。「懐旧録」に「父君、祖父君共に作州津山にましましてしかば」とあるのは、その時のことである。

愛山五才の頃までは天文台家敷にあって、多数の天文方手附連中より、金之丞は先生、一郎は小先生、愛山は幼先生と呼ばれて、何不自由のない生活を送っていたのであるが、（久間たか子刀自手記による）明治二年春、愛山六才の時、祖父母及び叔母だい（後に吉田信之氏に嫁す）等に伴われて、慶喜公の静岡移駐に従ひ、同所に所謂無移移住をしてから、筆舌に尽せぬ貧困の生活が始まったのである。その状態は「懐旧録」に見らるる如くであった。

祖母ふさ子、父一郎が共に静岡横内町の勸工場につとめ、か

らうじて一家の生計を維持したのであるが、祖父は落ちぶれた貴族の如く徒食していたらしい。表芸であった和算はすでに時代に通用しなくなっていたのである。住所も七軒町、一が番、西草深と転々した。愛山が学校が引けると旧知入江氏に出かけその老刀自に書籍を読んで聞かせ、飯振舞いにあずかるのを幸とした時代である。金之丞も酒を嗜んだが、就中、敗戦流離の間に深酒にしたんだ一郎は酒癖があつて、一家の荷厄介になつたらしく、後年愛山の語るところによれば、今の酒乱は恐ろしいが、昔の酒乱はすぐ隠し持った太刀を振り舞し、そのあげく八野の山が晩まで保てば、天下はおいらのものだった（注・彰義隊に呼応する五月十五日夜の焼打ち計画に見果てぬ夢をいだいて日頃のうっ憤をもらすのである。）と呼号するのを常としたが、これには閉口した。俺なども親仁から八酒は呑むべし、兵用ふべし、酒吞ますんば丈夫の子にあらずと教育されたが、酒癖の有様を実地に見せつけられては酒を呑む気も起らなかつたと述懐している。

こんな状態であつたから愛山は嶽頭学校を卒業すると、直に同校の助教となつて、自ら家を支へ、この父に仕へ、また祖父母をも養わねばならない境遇に置かれたのである。『多難窮乏の中に生れ、逆悪なる運命と戦ふ。馬琴が所謂無益の書を作りて、有用の書を買はざるを得ざるもの実に僕の真境なり』（明治三十四年刊・読史論集序）と後に愛山が告白しているのは、まったくこの点にあつた。

金之丞は明治十四年九月廿四日（愛山十八才）、一郎は明治

廿一年六月五日（愛山二十五才）にいずれも静岡で病歿した。

これよりさき、明治二十年、この頃愛山は塚頭学校の助教をやめ、幾分収入の多い静岡警察署の雇吏となっていたが、旅行先の越前福井、足羽山上において、「ああ国民之友は生れたり」の一文をよんで、『山に上り山を下る間、遂に山色水色の何たるかを知るに及ばざりき』（明治三十九年一月・新公論）とまで感激し、遂に徳富先生に書を寄せて上京の意を示したのである。しかし、この父をかかえて如何とも成し難く、明治二十二年、一郎の死後、平岩愼保先生の推薦により、はじめて長年鞠養せられた祖母を伴って上京し、東洋英和学校に学び、後には芝、伊皿子台にあった同校寄宿舎の世話人を務めた次第である。

この東洋英和学校時代の手記（明治二十二年十一月）には、「如山生」と署名してあるので、この頃は如山と号したらしくそれはおそらく、幼時虚弱で腕白な泣虫であったことへの反省からのものであろう。

余談ではあるが、蘇峰先生の晩年、湯河原にお訪ねした際、「君の親仁が二十年に初めて手紙をよこした時は、東京で十円かせげる口があつたら上京したいから、世話をして欲しい、とあつたが、まだ見たこともない人だし、その時はいちおうお断りした。その後上京したという手紙はもらつたが、はじめて会つたのは憲法発布祝賀の当日である。雪の日で、民友社に訪ねて来た。働かせて欲しい、というので、何か書いたものを持って来たかという、持つては来ないが、今ここで書くという。実に速筆で堂々たるものであつたよ。」とお話下さつたのには、

不肖の子は身の縮む思いであつた。

さて、こうした貧困生活の中にあつて、注意すべきものは、なお武士的気概を失わない周囲の環境であつた。愛山を育てた祖母は、『氣丈でよく笑い、よく語る女性であつた。』（明治三十八年十二月・独立評論）が、その祖母が愛山の手習いの師匠を選ぶに際し、「懐旧録」に見られるとおり、菊地鬼塘は町人なればとて、田中薫丘につかした如きは、その端的の現れと見られよう。

愛山十八才の時まで在世した祖父金之丞も、暦法・算法上の功績では弥左衛門主任・才助徳風・弥左衛門諸孝ほどの事はなかつたが、なお若き日にはテレグラフを伝習し、諸孝と共に「遠眼鏡図説」を著した新知識であり、その他外祖母奥留ふき子の如き、吉田信之（叔母だいの夫）の如き周囲に文字のある者の多かつた事も、愛山にとつては不幸中の幸であつた。奥留ふき子は歌を詠む人で、常に愛山の周囲に対して、『御身等不幸にして先祖以来の家業を失ひ、辺土に人となりたれども、田舎に住めば芋は畑に生り、富士は何時も目の前にあり、野辺の鶯我がものにして暮せば何の不足もなし』（明治三十八年十二月・独立評論）と教訓するのが常だつたという。

懐 旧 録

余が幼き頃の教育は奥留の外祖母に負ふ所多しと思ひぬ。外祖母名はふき、我玄祖父徳風君の庶出の子なり。

徳風君は奇行磊落の行ありし人なりき。其の事今に伝はりし

一二を挙ぐるに、家至つて貧しかりしに、太だ酒を好み玉ひし。或時酒鋪の用きき久助といへるもの来りしことありしに、やあ久助庭へ廻れとの玉ひけり。久助心得ぬことに思ひながら庭へまはりて見るに、徳風君手に釜を持ち縁に踏みまたがりて、酒の代にすべきものなし、これを錢に代へて一升持ち来れとの玉ひき。又若老寄の何某を知りて屢々行きかよひ賜ふことありしに、或時玄関にて袴のすそより犢尾褌をあらはし玉ひしかば、人見かねて告げまゐらせしに、左様かとの玉ひて懐よりたぐり込み玉ひしといへり。徳風君正妻なし、常に妻を置きたまふに、妾の如きは久しく居れば驕る者なりと三年に過ぐれば必ず何か難をつけて追出し玉ふことを常とす。奥留の祖母の母も妾となりて三年ばかり曆るに、或時三月の雛買うてたまはれと願ひしかば、買ふてたまはりしに、小きなり、大なるを買うてたまはり候へと申ししに、妾の分際にてかかる我儘言ふをやるると追出し玉ひしなり。

此の刀自、歌をよくよみ玉ひ、和漢の事ども知りておはせしかば、吾れは幼き頃より武蔵坊弁慶の話などを此の刀自より聞きしを覚えぬ。八犬伝犬の草紙といふもの、此の刀自我に持ち来りて貸したまひぬ。且つ絵ときして聞かせ玉ひき。我れが初めての教育は実に家に蔵せし竹取物語（山東京伝著）と八犬伝犬の草紙とに因りて始められしなり。竹取物語に記せる清川が山賊を退治せる処など其頃見るを楽しみけるものなり。

吾れ田中氏に行かざる前より、いろはなど読み習ひ、犬の草紙

などすこしは自ら読むを得しやに覚えぬ。

田中氏にて席書といふことをせしに我は

仰見明月

といへる四字を書きて祖母に賞められしことありき。家に還れば其の夜は明月なりしかば、これが仰見明月なりとて外祖母の語りたまひき。

又其の頃津山より父上書簡を送りたまひて、老人のみにて、甘やかしそだて玉ふなと申し来りしとて、祖母上が余を督促して手習など怠るなどの玉ひしことありき。

津山に書簡やれとて、田中氏に乞ひて手本書きてもらひしことありき。

田中氏に通学せる頃、今の佐藤頤理（重道）瀟洒たる青年にて英語が出来ると云はれ、屢々田中氏に来たれり。余は久永濤三郎と共に田中氏より英語階梯を教へられしことあり、又パーレー万国史の釈業を聞きしことあり。されど英語階梯を亡ひしかば余は英語の研究を止めたり。中庸の口釈聞くとて夜に行きしことありき。其の頃久永は中庸の序が独り読みが出来るとて我党の大先生なりき。

三穂村に吾が始めて遊びしはいつの頃にやありけん覚えず、太田虎吉氏も共に行きしに、太田育高く足はやかりしかば余はおほいに後れたり。影山薰三郎も余と同じく行きしやに覚ゆ。されば余が寮頭学校の助教をやめてより後の事なり。

其後、吉井文三、石井勝一などと共に遊びしことありき。清水

より三穂の渡場にて藤川春哉、同勝丸、同つが子と一つになりぬ。つが子はいとうるはしき女性なりき。此時にこそ吾れは始めて女性のよきを覚えぬ。つが子は此頃細野氏の妻となりしが故ありて別居して、父と共に住まひしなり。吾れは家に還りてつが子の如き女性を我が妻と祈りぬ。

萩原貴香、馬場市松等と共に行きしは同じ時なりけん覚えず。渡頭にて舟くつがへらんとせしとき馬場がおそれをなして顔色を変じけるとて人々笑ひたりき。平岩氏の杖を黙つて借りて行き失ひ還りしはこの時の事か。

其の頃、風の吹く日に池田次郎吉、横山一直と共に行き詩などを賦せしことありき。

吾れ恋といふ程の恋せしことなし。さりながら幼き頃学校の友なりける岸田ふゆ子は其の目になさけ深きところある様に覚えて我が心の偶像なりき。寮頭学校に生徒たりし時は星野錦太郎の妹娘こそ可愛げなる女子なりと思ひぬ。助教たりしころは女生徒の中の○○○○といへる可憐なりし、然るに彼は悪疾のすじ也といふを聞きて初めて遺伝の恐ろしきを知りぬ。一が番の後に住みし高林いよ子といへるはあてやかにて隠和なりしが、歌も詠み花もいけぬ。我が二十二三の頃にそが母より吾れに婚姻を申込みし時我が心浮立つか如く覚えしかども故ありて止みぬ。戸田きやう子は根岸氏の母によりて我れに婚姻の話ありしかども中止し、角田こと子は約既に成りしかども吾れ上京に決意せしかば終に破談となりぬ。

かかるを書置くは我が歴史なればなり、人に見せんとには

あらじ。

我が幼時の教育は吉田信之氏に因れり。信之氏は余が叔母の夫なり。余は氏より四書、五経、国史略の素読を受けたり。氏は我が叔母の嫁せしころは静岡城内に住せしが、余は福岡某と共に一が番より夜々吉田氏にかよひて素読の稽古を為せり。吉田氏は其の頃修静舎とか云へる小学校の助教たりき。其の後氏は度量衡改正の役人となりて城の腰などに出張せしことありしが、後に県の等外二等となり、更に十七等出仕に補せられたり。

吉田氏にて中庸を学ぶ時、終日眷々と云ふ辭、堂しても覚えられず困りしが雉の声なりと曰はれ、雉の声を知らず、雉はケンケンと啼くものぞと教へられたることあり。

吾れ余りにきたなきなりせしかば、吉田氏はも少し綺麗にせよと注意し、「おまいが湯に入らないのはかまはないのでない、無性なのだ」と叱られしことありき。

吉田氏と共に中塚に釣してすべり落ちしことありき。

解題

蘇峰先生、愛山を追悼して曰く、『君にして若し趣味ありとせば、そは平民的趣味なり、君は実に無頓着なるのみならず、無頓着を以て自ら誇りとなせり、極言すれば君は無頓着なるべ

く頓着したりと言ふべきなり』(大正六年三月十八日・国民新聞)といつて居るが、この性行は実は山路家の血管を伝流せるものであつて、「懐旧録」にみえる才助徳風君の逸話の如き、その恰好の例証と言ふべきものであらう。或は又、その父一郎の如きは、極めて数奇な運命に弄された人であつたが、その生涯を貫いた抵抗の精神は、さながら愛山によつて受け継がれたと言うべく、ここに至つて血脈の色濃きを思わざるを得ないものがある。

しかも愛山はこうした人々を先代に持つたことを決して不愉快とは感じなかつたらしい。後年のことではあるが、毎年正月の三日間、才助徳風以下の画像を床の間に掲げ、子女をその前に跪坐せしめて、汝等廉恥を重じ祖先の名を辱しめる事勿れと戒訓するのを常としたところを見ると、愛山はかつて他に向つてそれを語つた事こそなければ、己の家系に一種の誇りを感じていたらしい。水平線下の生活を営みながら、なお自恃の精神を失わなかつた大きな支柱は実にこの点にあつたと思われる。

前にも記したごとく、愛山は塚頭学校の助教をやめると静岡の警察署の雇吏となつたがこの頃太田虎吉・池田次郎吉・横山一直・萩原貴香等の同好の青年を語らい「呉山一峰」という回覧誌を作つた事がある。その内容は今は知るべくもないが、「懐旧録」に『その頃池田次郎吉・横山一直と共に行き詩など賦せしことあり』とみえているのはこれと関係のある記事と察しられる。又同じ頃の事であるが、床屋の親仁に頼まれて「職人向上会」なるものを組織し、「西国立志編」の講読を試み、ま

んまと失敗したことがあつたという。

しかし、これなどは愛山の一面を物語つて面白い。愛山は極めて不遇な、所謂貧乏士族の環境に育ちながらも、独り孤高を樂しむことなく、むしろ餓鬼大将たることを以つて自ら任じていた。そうしてこれは抵抗の精神がもたらした愛山の姿勢でもあつた。

静岡時代の愛山に最も大きな影響を与えた一人に平岩愼保氏がある。「懐旧録」には『平岩氏の杖を黙つて借りて行き、失ひ還りしはこの時のことか』とばかりであるが、愛山は平岩氏に導かれてキリスト教(カナダメソヂスト)に入った。この頃以来の朋友には後に青山学院の院長となつた高木壬太郎氏があつた。愛山は初め田中薫丘に英語の手ほどきを受けたが、これはものにならずにしまい、この頃平岩氏関係による宣教師やキリスト者連から再び英語を習ひ出したのであるが、「聖書の講義の時は居睡り、英語の授業の時は目を見ひらいた」と、もつともらしい逸話が伝えられている。たしかに、愛山仲間の若者連が宣教師に接したのは、英語を只で教えて貰えるという点の魅力からで、必ずしもキリスト教そのものに引かれたものではなかつたらしいが、聖書の講義を聴くうちに、若者連はつきつぎにこの新しい教えに入信した。愛山は明治のキリスト教会の人物を論じて、その多くが所謂賊軍の子弟の出であることに言及し彼等が物質界より寧ろ精神界の勇者たらむと志した必然性を説いているが(現代日本教会史論・明治三十八年・愛山四十二才)これはその儘、若き愛山らの心境であつたのかも知れぬ。

明治二十三年、(愛山・二十七才) 東洋英和学校における手記に

「愛山生が身を終るまでに研究すべき事項」と題して

第一 聖書

第二 基督教の歴史(教会、教理、及び社会・個人に於ける

感化の)

第三 各国の聖書(仏教、波羅門教の類)

第四 文明史

第五 商業地理

第六 生物学

第七 物理学及数学

第八 東西詩文

とあり、二十三年夏から二十四年夏までは遠江袋井に牧師として赴任したのであるから、この頃までの愛山の信仰は疑われない。ただし、「研究すべき」と研究という文字を使っている点、聖書という文字を広い範囲で用いている点など、将来、歴史家或は史論家として世に出る愛山を予想させるものがみられる。

ここで、第七に物理学及び数学をあげているのは、おそらく家学への郷愁であろうが、商業地理・生物学が東西詩文より先行しているのは後の愛山史学の立場と考え合せて興味が深い。かつて某氏が愛山を評して「彼は一おうマルクスの史的唯物論を承認しながらも、その階級闘争を受け容れることができなかったために、かえってこれに反撥した。そしてドイツ流の実証主義によって著しく科学的な内容をもつようになった官府の史

学に妥協を求めている。」といっているが、愛山は先もの買いの観念論者でもなければ、創作家でもない。いわんや、或る一定の主義の宣伝者でもなかった。愛山は歴史家として史料の如何に重んずべきかは十二分に承知していた。ただ若くして史料の蓄積の不充分の時代には、推理をもってその間隙を補う外はなかった。はやく「唐宋八家文を読む」(明治二十八年・国民之友第二五二号・愛山三十二才)のうちで、『余が嘗て山陽論を草するや、森田思軒君は余が材料の少き事を忠告せられたり。余は其の後輩を誘掖する忠告を感謝す。然れども余は猶文籍を涉猟し得べき長日月の未来を有す。精敏及びなかりし源白石すらも其の材料に豊かなるを得しは六十以後にあり、頼襄は五十三歳の比較的若年に死したるを以て、其の史は遺漏多きものとして後の史家に笑はれたり。余は読書に時を愛まざらんと欲す。然れども余の如き若輩にして材料の豊富ならん事を欲すれば、余はその仮粧に陥らんことを恐るるなり。』と告白している。ある歴史家が歴史家として次第に成長し、蓄積によって史料が豊富になれば、推理の部分はおのずから狭くなるであろう。これはもとより自然のことである。愛山は最も晩年の作である「徳川家康」(大正四年・愛山五十二才)の序文において、「日本及日本人」誌上に掲載された一匿名氏の批評に答えて、極めて些細な点までも一一根拠を示して論駁を試みているが、「徳川家康」の本文そのものには、些かも官府の史学に時折りみられた実証主義風な煩鎖さはみとめられなかった。のみならず、その若き日に志した歴史学——『その中に因果の理法もなく、

前提及結論もなく、一つの法則をも、一つの原理をも教えざるものは史学にあらず』(明治三十三年・国民新聞、愛山三十七才)——との主張は「徳川家康」論の背骨を形成している。

マルクスの史的唯物論に対する愛山の知識及び理解が、どの程度のものであったかは知らぬ。おそらくその疎枝大葉を知るところにとどまつたであろう。しかしながら、その以前、愛山は地に生れおちて以来、物質の力をまざまざと思ひ知らされる境遇にあった。と同時に、愛山の血管には科学者としての血が伝流していた。物理学及び数学を研究しようとしたことは家学への郷愁であったとしても、詩文の研究よりも、商業地理、生物学の研究をまず考えたことは遺伝と環境とがもたらしたその本然之性であつたらう。これにキリスト教の洗礼がからみ合うのである。ここで愛山は物質を超えた一個の偉大なる魂の働きにふれ

たのであつた。愛山の史学がいちおう經濟史觀的立場をとりながら、主として人物を論じ、しかも常に温かくその人物に接する秘密はここにあつた。愛山の史学は、よかれあしかれその内心から発したもので決して観念の仮粧の上に組み立てられたものではない。「懐旧録」にみえるところ、幼時の愛山は就学が遅れたほどの虚弱児であり、泣虫であつた。他人に筆を貰うのを嫌がったほど神經質な小児であつた。細かい計算をたて得る数学畑の家に人と為つた。しかも愛山の生涯を貫いた抵抗的精神はこれらの一切を背後に埋没して、一種豪快ともみられる姿勢をとらせた。蘇峰先生が「無頓着なるべく頓着したり」というのはこの点であろう。この二面性は愛山を考える上で無視し得ぬものである。